

特集 JICAボランティア  
私と世界をつなぐ道



## 小さな村の結婚式

from Uganda ウガンダ

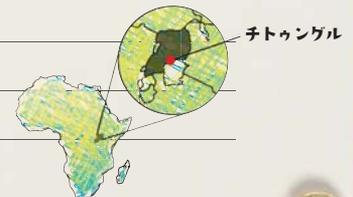


ウガンダの空の玄関口、エンテベ国際空港そばの村チトゥンゲルで、華やかな伝統行事が行われていた。その名も“イントロダクション”。結婚式前に花嫁の親族の女性が次々と花婿の親族の前に現れ、花婿側はその中から本当の“花嫁”を見つけ出すというものだ。

ウガンダの結婚式は、花嫁の家で行われることがほとんど。会場では大人数分の料理が準備され、ダンスや歌などが1日を通して繰り返される。そしてこのイントロダクションも、親族総出で行われるのだ。

「私たちの家族にお嫁に来てくれたことを感謝し、生涯大切にします」。花婿の母親がそう誓い、花嫁とその家族はこみ上げる涙を拭きながら、互いに抱き合う。その姿はとても温かくて、印象的だった。

日々目まぐるしく変わる環境の中でも、独自の文化を尊重する習慣は現在も息づいている。



チトゥンゲル

撮影：伊計優香（ウガンダノ青年海外協力隊）

## あなたの作品募集中！

「my photo」では、あなたが撮影した写真を募集しています。貧困や環境問題などをテーマにした写真、国内外問わず国際協力の最前線で活動に励む日本人や途上国の人の姿、テレビや新聞ではなかなか報じられない土地の風景や人々の暮らしなど、国際協力や開発途上国を身近に感じられる写真を、撮影時のエピソードを添えてご応募ください。応募作品の中から毎号1枚、本コーナーで紹介させていただきます。

**応募条件** ①応募者本人が撮影した作品に限ります。②被写体に関する肖像権は、応募者の責任において了解が得られているものとします。③写真は、解像度が300万画素以上(目安)で撮影されていること、また画像の記録方式はJPEGを推奨します。

**応募方法** お名前、連絡先(電話番号とEメール)、エピソード(300~350字)、記名の可否をご記入の上、写真とともに応募先アドレスまでEメールでお送りください。

\*応募作品は本コーナーのほかに、事前確認の上でJICAの広報活動に活用させていただく場合があります。ご記入いただいた個人情報はこれら以外の目的では使用いたしません。また、応募作品はご返却いたしませんので、あらかじめご了承ください。

応募 / 問い合わせ先

jica-photo@idj.co.jp

(『mundi』編集部宛)

「mundi」はラテン語で“世界”。開発途上国の現状や、現場で活動する人々の姿を紹介するJICA広報誌です。

## Contents

02 my photo 小さな村の結婚式 ウガンダ

## 04 特集 JICAボランティア 私と世界をつなぐ道

巻頭対談 スポーツで世界とつながる 北澤豪さん×黒木豪さん  
手を取り合って前に進む マラウイ  
人と人を結ぶ懸け橋に キルギス  
砂浜を守る熟練の技 コロンビア  
協力隊の経験、どう生きていますか？



18 PLAYERS 海外経験で新しい風を起こせ 株式会社マダム

20 地域と世界のきずな 国際協力で豊かなまちづくりを 長野県駒ヶ根市

## 22 世界とつながる教室 “つくばスタイル科”で 国際協力！

つくば桜並木学園つくば市立桜南小学校



24 JICA STAFF 中村 史 JICA青年海外協力隊事務局 中南米課

25 JICA UPDATE

26 Voice 田原 総一郎 ジャーナリスト

28 ココシリ 「ここが知りたい」いろんなトピックを分かりやすく解説！

## 30 地球ギャラリー ソマリア 動き出した時間



37 イチオン! 本・映画・イベント

39 MONO語り 遊牧民の知恵から生まれたフェルト

40 私のなんとかしなきゃ! 知花 くらら モデル



JICAのビジョン

すべての人々が恩恵を受ける、  
ダイナミックな開発を進めます

Inclusive and Dynamic Development

表紙  
撮影：久野真一

カンボジアの教員養成校で活動する青年海外協力隊員の畑里佳さん。明るく元気な彼女の周りには、いつも子どもたちがいっぱいだ





ブラジル子どもたちと。途上国訪問時のサッカー教室は恒例になっている

# スポーツで 世界とつながる

## 頭対談



隊員時代、指導した生徒たちと試合後にハイタッチで健闘をたたえ合う

るJICAボランティア。  
一つがスポーツだ。  
ジルで野球を指導した黒木豪さんに、  
国際協力について聞いた。

開発途上国で活動す  
その活動分野の  
サッカー解説者の北澤豪さんとブラ  
スポーツを通じてできる

# 北澤豪さん

### スポーツマンシップを たたき込む

**黒木** 学生時代はずっと野球漬けの生活でした。本当にスポーツしかしていません。海外に行くどころか、大学の英語の授業も再履修になったくらいで(笑)。今思えば、本当に狭い世界で生きていました。

**北澤** それがなぜ、いきなりブラジルで野球を教えることに？

**黒木** 指導者としてスポーツに携わりたいたと、大学卒業後は中学校の講師になりました。でもこんな僕が教壇に立つていいのかわからないとあつて。常に人と真正面から向き合う仕事で、しかも相手は思春期真っただ中の中学生。もっと視野を広げなければいけないと日々感じていました。

そんな時、大学時代の恩師からJICAボランティアの話が聞きました。価値観を変えるなら、地球の反対側に行くくらいじゃないとだめだと。まさに、当時の僕にぴったりでした。実際に派遣になったのは、本当に日本の反対側にあるブラジルでした。

**北澤** でもブラジルって言えば、サッカーじゃないですか？そこで野球を教える

って大変じゃありませんでしたか？

**黒木** サンパウロ郊外で中学生の日系人野球チームのコーチを任されたのですが、膝から下にボールがきたら足でトラップするんですね。小さいころからサッカーをやっているんで、自然と足が出てしまっただけなんです。野球に情熱もなくて、最初は「この日本人、一体何しに来たの？」という反応でした。

**北澤** 僕も同じような経験があります。JICAオフィシャルサポーターとしてパラグアイに行った時のことです。あちらは言わずと知れたサッカー大国。中学校でサッカー教室を開くことになったのですが、現地のコーチたちは「日本人から習うことなんてない」という反応でした。

**黒木** 野球の技術以外にも、礼儀なども教えてほしいと言われていました。最初は少しづつ様子を見ながら進めるつもりだったのですが、遅刻はする、あいさつはしない、道具は雑に扱うなど、とにかくひどい。2、3カ月たつて日本人が来

ても何も変わらないと思われたら、そこからの軌道修正はすごく難しいと感じました。それなら最初からシヨックを与えようと、礼の仕方からグラウンドの整備の方法、食事の作法までとにかく厳しく教えました。

**北澤** 同じ種目でも、国によって戦略も違うし、全てを分かり合えるわけではない。でも、黒木さんが教えたような技術以外の努力は、スポーツでも、一人の人間としても、とても大切なこと。メンタルがきちんとしないと良いプレーもできませんから。日本人の武士道の精神というか、そういうことが教えられるのは、JICAボランティアの強みかもしれませんね。

### ないものから生み出す 日本人スピリット

**黒木** でも最初は、なかなか理解しても

況を見ながら、良い部分は尊重して、足りないなどと思うことをサッカー教室の練習メニューのヒントにしています。パラグアイでは「コミュニケーション能力」を身に付けるために2人組のパス練習を取り入れたら、子どもたちは伸び伸びとプレーできるようになりました。

### 6年後に向けて スポーツを盛り上げる

**北澤** 2020年の東京オリンピックに向けて、日本国内ではスポーツの役割が変わってくると思います。競技としてだけではなく、スポーツがもっと身近なものとして広まってほしい。そして何よりもスポーツは教育。そのためには、多様な価値観を伝えることのできる指導者の育成が急務です。黒木さんのように途上国に飛び込んで、いろいろな経験を積んだ人をもっと増えるといいなと思っています。

**黒木** 僕もスポーツをやっている大学生

たちに、JICAボランティアへの参加をぜひ勧めたい。僕自身、日本に帰国してから指導の姿勢、学生との向き合い方が変わってきたように感じます。最近は安定志向の学生が多いのが残念です。チャンスがたくさんあるのにもつたない。考える前にやってみると彼らには言っています。

**北澤** これから6年で、日本の流れを大きく変えるのは難しいかもしれないけれど、少しずつ、スポーツを通じてできることを増やしていきたいですね。その一つとして、昨年、社会貢献活動「スポーツプロボノ」を立ち上げました。この分野で途上国とつながれる方法を、一緒に見つけていきましょう。

# 黒木豪さん



**黒木 豪 KUROKI Go**

日本体育大学 学生支援センター職員、野球部コーチ/  
日系社会青年ボランティアOB

1985年宮崎県出身。横浜高校時代、選抜高等学校野球大会で4番打者として準優勝に貢献。日本体育大学卒業後、中学校の保健体育講師に。2009～2011年、日系社会青年ボランティア(野球)としてブラジルで活動。2013年WBCブラジル代表コーチ。

**北澤 豪 KITAZAWA Tsuyoshi**

サッカー解説者/JICA オフィシャルサポーター

1968年東京都出身。元サッカー日本代表MF。現役引退後は、サッカー解説者の傍ら、国内外の若者へのサッカー普及に取り組む。2004年よりJICAオフィシャルサポーター。2013年には社会貢献活動の一環として「スポーツプロボノ」を立ち上げる。



## JICAボランティアに参加するには?

### 話を聞きに行こう!

毎年、春と秋の募集時期に合わせて、全国で「体験談&説明会」を実施。JICA職員やJICAボランティア経験者があなたの疑問や不安を解消してくれる。



### 応募書類を提出しよう!

応募に必要な書類は、「体験談&説明会」、JICAのホームページ(www.jica.go.jp/volunteer/)、JICAの国内機関などで入手可能。書類選考、面接試験などを経て、合格者を決定。

### 派遣前の準備はしっかりと!

合格通知を受け取ったその瞬間から、あなたはJICAボランティア。JICA二本松訓練所(福島県)、JICA駒ヶ根訓練所(長野県)で活動に必要な語学や生活のノウハウ、国際協力の知識について、約2カ月間みっちり学ぶ。その他にも、実践的な技術の習得に向けて「技術補完研修」が行われることもある。



### いざ現地へ!

準備ができたら、あとは派遣国に向かうだけ。現地のJICA事務所でオリエンテーション、語学訓練を受けて配属先に向かう。活動や生活で困っても、JICA職員や先輩ボランティアが相談に乗ってくれる。

### 次に進む道を考えよう!

帰国後は、東京で研修を受けてからそれぞれの道へ。プロのカウンセラーによる進路相談、JICAボランティア経験者向けの就職情報の提供などのサポートも手厚い。

この49年間で  
途上国に飛び立った  
JICAボランティアは、

**96カ国**  
**約4万6,000人!**



## 特集 JICAボランティア

# 私と世界をつなぐ道

開発途上国で現地の課題解決に向けて奮闘する日々。自分にはとてできない...と、立ち止まっている人はいないだろうか。JICAボランティアの参加方法はさまざま。勇気を出して、一歩を踏み出してみよう。

## まずは調べてみよう! あなたはどのタイプ?

20~39歳の方は /

### 青年海外協力隊



© Kenshiro Imamura

**受入国** 約80カ国(アジア、アフリカ、中南米、大洋州、中東)

**協力分野** 計画行政、公共・公益事業、農林水産、鉱工業、エネルギー、商業・観光、人的資源、保健・医療、社会福祉

**職種** 小学校教育、コミュニティー開発、看護師、スポーツ、環境教育など120種類以上

**期間** 原則2年

→ 活動事例は8ページ、12ページへ

40~69歳の方は /

### シニア海外ボランティア



© Satoshi Takahashi

**受入国** 約50カ国(アジア、アフリカ、中南米、大洋州、中東)

**協力分野** 計画行政、公共・公益事業、農林水産、鉱工業、エネルギー、商業・観光、人的資源、保健・医療、社会福祉

**職種** 行政サービス、品質管理、電気通信、マーケティングなど100種類以上

**期間** 原則2年

→ 活動事例は14ページへ

中南米の日系社会に興味のある方は /

### 日系社会青年ボランティア



© Koji Sato

### 日系社会シニア・ボランティア

**受入国** 約9カ国

**協力分野** 人的資源、保健・医療、農林水産、社会福祉など

**職種** 日本語教育、青少年活動、ソーシャルワーカー、小学校教育など

**期間** 原則2年

→ 活動事例は4ページへ

2年間はちょっと長いという方に...

### 短期ボランティア

日本を長く離れるのが難しくても、1年未満で参加できる制度もある。受入国、協力分野、職種は、青年海外協力隊、シニア海外ボランティアと同じ。

社会人にも参加のチャンスが...

### 現職参加

帰国後も今の職場で経験を生かしたいなら、所属先に身分を残したまま参加してみても?所属する企業、自治体、学校などに、休職・休暇などの扱いが可能か問い合わせよう。



from ラオス  
トンシン・タンマヴォン首相

- ラオスに初めて青年海外協力隊が派遣されたのは1965年。今から49年前にさかのぼります。
- 私たちの国には「共に生活し、同じものを食べ、共に転び、共に幸せを感じ、共に困難を克服する」という意味の「kingkeuklyleua」という言葉があります。JICAボランティアの皆さんの活躍を見て、私はこの言葉を思い出しました。
- 日本とは全く環境の違う国で活動を続けることは、相当の努力がないと達成することができないでしょう。日本人はいつも真面目で一生涯懸命です。創

- 意工夫を重ね、研究し、アイデアを生み出す能力があり、そんな彼らの姿から私たちは多くのことを学んできました。異なる文化、習慣を理解しながら貢献してきたJICAボランティアの皆さんに、お礼を申し上げます。
- ラオスの国づくりを担う人材を育成していく上で、JICAボランティアの皆さんはなくてはならない存在です。今後も多くの方が日本からこの地を訪れ、国民と共に幸せを分かち合い、困難を乗り越えていられることを願っています。

信号のない一本道を走り続けること5時間、車は脇道に入ってしまった。ガタガタガタ。アスファルトの道路とは打って変わり、土の道はこぼれ道を進む。この先に本当に日本人がいるのだろうか。そんな不安を抱かざるを得なかったが、しばらくするとレンガ造りの建物が見えてきた。子どもたちが駆け回っているのが見える。どうやらあそこが学校らしい。車を止めると、日



バンダさんの苦手の発音を何回も練習。個別指導は分かりやすいと生徒たちから大人気だ

どの小さな国。給水や発電施設、道路などのインフラ整備が遅れ、主要な産業もない。一人当たり国民総所得（GNI）は、日本の150分の1ほどだ。日本は1971年の青年海外協力隊の派遣に始まり、かんがい施設の整備や井戸の掘削、学校建設や教員養成などを支援。40年以上にわたり、その協力の中核を担ってきたJICAボランティアは、これまで1600人以上が農業、医療、教育など幅広い分野で汗を流してきた。

本からの来訪者が珍しいのか、子どもたちが集まってきた。カメラを見つめるやいなや、お気に入りポーズをとる。「撮って！」とは言わず、しきりにカメラを指差しては、シャッターを押すしぐさをする。「この学校に通う生徒たちは耳に障害を持っています。音が聞こえずうまく発音できないので、あまり言葉を発しません」。そう教えてくれたのは平井香織さん。ここで彼らの「先生」として活動する青年海外協力隊員だ。

言語聴覚士の資格を持ち、約10



地方部では水道が整備されていない地域も多い。「地元の人に教えてもらいながら、ちょっとずつ水の量を増やして練習しました」とバケツを頭に載せて運ぶ平井さん

年にわたり日本の老人介護施設や病院で働いてきた平井さん。偶然にも周りに協力隊の経験者が多く、よく話を聞く機会があった。チリで障害者のリハビリを担当した同僚からは、「近くにリハビリ施設がなく、テレビのリモコンを使って手を動かす訓練をした」と聞いた。驚きだった。「工夫次第でできることがある。私も力になりたいと思うようになりました」。ここエンバングエニ聴覚障害児特別学校には、園児から高校生まで約190人が通っている。これから同僚の先生と授業をするという平井さんについていくと、教室には教だんを取り囲むように9人の生徒が座っている。「カールーム」「カールーム」。先生の口の

動きをまねて、発音の練習をする。なかなか難しそうだ。苦戦している子を見つけた平井さんは、「放課後に個別指導をしましょうか」と同僚の先生に提案。「聴覚障害といっても、一人一人程度が違います。それぞれに合わせた指導が必要なんです」と平井さんは話す。この日は、グローリー・バンダさん（13）の個別指導の日。Kの音がうまく出せない彼女に、ブックやキッチンなどの発音を練習。「今日は前よりうまくできてうれしい」と手話で話してくれた。そんな様子を見てマクラード・ハラ校長は、「カオリは、生徒一人一人の発音の癖を素早く見抜き、どう声を出せばいいのか適切にアドバイスしてくれます。彼

雨期のマラウイは一面が緑に染まる

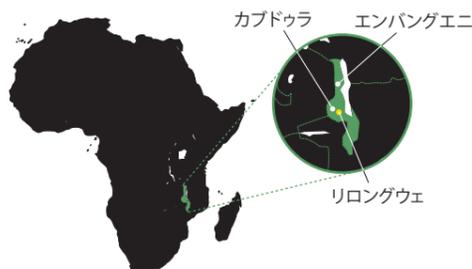
発音練習で生徒一人一人の音の違いを聞き分ける平井さん



マラウイと日本をつなぐ JICAボランティア  
地平線まで続く緑の大地、そこに点在する小さな家々。色鮮やかな服を着た女性たちは頭の上に荷物を載せて歩き、子どもたちは元気いっぱいにはだして駆け回る。2月上旬、日本から丸1日かけてたどり着いたアフリカ南東部の

マラウイ。首都リロンゲウエから北へ向かう車中から見えたのは、そんなアフリカらしい光景だった。雪舞う東京から一転、雨期の真ただただで蒸し暑い。「この国の人たちは日本に好感を持ってますよ。これまでたくさん助けてくれたから」と地元の人と話すと、マラウイは、北海道と九州の面積を合わせたほ

マラウイ from MALAWI



# 手を取り合って 前に進む

アフリカ南東部のマラウイ。日本ではあまりなじみのないこの国で、現地の人たちと共に汗を流す青年海外協力隊員の活動を追った。

青年海外協力隊

写真：今村健志郎（フォトグラファー）



実験でどんな化学変化が起きるのかを講義。実験前ということもあり、真剣に聞き入る生徒たち



実験器具を整理整頓。これなら同僚の先生も実験を行いやすい

色が変わって来たよ！」という声が上がった。硫酸銅の水溶液の中で化学変化が起き、銅板の銅がスプーンに付着している。

「これは電気メッキといって、鉄がさびるのを防ぐため、別の金属で覆う方法です。ほら、このドアノブも、この教室の屋根も実はそうやって鉄を加工したもんなんですよ」と来島さん。新しい発見にみんなの目が輝く。「自分で実験すると、化学変化がよく理解できます」とロネシ・ジョサファデ

イさん(19)は楽しそうだ。そんな大人気の実験の時間だが、実は、来島さんが来るまでは、ほとんど行われていなかった。教科書の内容を説明する授業ばかりで、みんなどうしても理科が好きになれなかったのだ。「面白いからこそ、もっと知りたいと思って、分らないことにも挑戦していけるのだと思います」と来島さん。そういう彼自身も、宇宙誕生の謎について研究を続け、物理学の博士号を取得した経歴の持ち主だ。「だ

って楽しかったですから」と笑う。在学中には3カ月間、アジアを回る旅もした。「学校に行けない子どもたちに出会い、理科を教えることで彼らの人生の選択肢を広げられないかと思うようになりました」。大学院卒業後、教員の経験はなかったが、協力隊への道を選んだのはそんな理由からだ。

理科の楽しさをもっと知ってもらいたい。来島さんはそんな思いで、放課後に誰でも参加できる「サイエンスクラブ」を立ち上げた。水圧でペットボトルを飛ばすロケットを作ったり、カボチャの種類から油を抽出したりと、実験室はいつも笑いに溢れている。「今ではクラブ設立当初の倍の40人が参加するほどの人気です」と理科担当のジョン・ムテンガブンバ先生。「授業にもっと実験を取り入れてほしいと、コウタロウは使われていなかった実験器具を整理してくれたり、器具の使い方を教えてくれました」と話す。

「将来は車を造るエンジニアになりたいです」とヘネリ・ボンベくん(17)。子どもたちの夢

は広がるばかりだ。来島さんの次の目標は、近隣の学校でも理科の実験を増やしてもらうこと。すでに、7校でサイエンスクラブの立ち上げに協力し、実験の結果を発表するコンテストも開催した。「各校の先生を集めて、実験の内容や方法を学び合う研修を開こうと企画しています」。これからその打ち合わせがある、隣の学校に向けてさっそうと飛び出している。

遠いマラウイで活躍するJICAボランティア。彼らのそばにはいつも、目を輝かせた子どもたちがいた。これからもこの国の人々に夢と希望を与える存在でいてほしい。



[上]いつも元気いっぱいの子もたち。これからの成長を見せてくれるのだろう  
[下]他校の先生と打ち合わせ。「次の研修では、ヨウ素液を使って、でんぶんの反応を調べる実験を紹介したい」



縫製の授業で作ったカチューシャやシュシュなどはバザーで販売。収入を得る術を学んでもらう

女が来てからみんなよく言葉が発するようになったし、他の先生たちも発音指導の技術を学んでいます」と感謝を述べる。

午後になり、今度は高校生の授業の準備を始める平井さん。「卒業後に自分の力で収入を得られるよう、手に職をつけてほしい」。隣町の協力隊員、中谷衣里さんの協力を得てミシンを使った縫製技術を教えている。今日の課題はバッグ作りだ。「ここで技術を学んで、将来は私の大好きな青い服を作りたいんです！」と、ダビダ・ピリーさん(17)は満面の笑みを見せてくれた。

北西に車で2時間のところにあるカブドゥラ中高等学校。約400人の生徒が通う学校の教室から元気な声が聞こえてきた。中でも、高学年の授業が盛り上がりつつあるようだ。

「では実験を始めましょう！」教だんに立つ青年海外協力隊員の来島孝太郎さんの一声で、6人ずつのグループに分かれた生徒たちが一斉に作業を始めた。スプーンと銅板に導線をつなぎ、電流を流したら、硫酸銅の水溶液につけてみる。

「何が起ころんだらう...」と、どの顔も好奇心でいっぱい。来島さんは、みんな実験を教えた通りできているか各グループを見て回る。しばらくすると、「スプーンの

「コウタロウ先生、スプーンに銅が付きました！」。電気メッキの実験を行う生徒たち



務先が海外進出を視野に入れたことに驚いた。「どんな企業で働こうと、もう国内だけを見ている時代ではないんだ」と。自分の働き方を考え直す機会になりました。それまで海外は遊びに行く場所だと思っていた。でもこれからは働く場になりたい。現地の人々の生活に溶け込んで仕事ができる青年海外協力隊は魅力的に映った。一つ不安だったのが、特別な技術がなかったこと。でも募集の中に自分にぴったりの職種を見つけた。それが、キルギスで日本文化を伝えるという活動だ。「祖母が茶道



2013年に開催した盆踊り大会。500人もの来場者が集まり大盛況だった



同僚と七夕祭りを企画。折り紙で笹を作り、センターを訪れた人に短冊を貼ってもらった

と華道の教室を開いていたので、子どものころから日本の伝統文化が身近にありました。私にもできることがあるのではと思ったのです。」

こうした活動は石川さんにも変化をもたらした。「小さな交流から、日本人はキルギス人を、キルギス人は日本人を身近な存在として大切にするようになります。そのお手伝いをするのが、私なりの国際協力だと思えるようになりました」。石川さんの思いが人を育て、国境を超えて人を結び付けている。

と華道の教室を開いていたので、子どものころから日本の伝統文化が身近にありました。私にもできることがあるのではと思ったのです。」

### 2年間で見つけた 自分なりの国際協力

キルギスの街中を走る車の7割は、日本の中古車。だからといって、日本文化が広く知られているわけではない。そこでセンターでは両国の交流を促進するために、ひな祭りや盆踊り、餅つき、書き初めなど年6回の年中行事の他、茶道や書道などを教える日本文化講座を定期的に開催。市内の学校や企業などに出張し、日本文化を教えることもある。年間のスケジュール

「最初は日本との感覚の違いに戸惑うことばかり。盆踊り大会では、終了時間まで30分もあつたのにスタッフが疲れたからと早く切り上げようとしたんです」と石川さんは振り返る。

ユール管理や個々のイベントの企画・実施など、やるべきことは盛りだくさんだ。

そして石川さんたちに力をくれるのは、何といつてもキルギスの子どもたちの笑顔だ。インターネット電話などで日本の子どもと交流する機会をつくったところ大盛況。「キルギスの文化を紹介したいから、日本語を教えて！」キルギスの工芸品を持って日本に送るの。日本に関心を持ってもらえただけでなく、自分の国の文化をあらためて見直すきっかけにもなっている。

キルギス  
from KYRGYZ



# 人と人を結ぶ懸け橋に

## 青年海外協力隊

中央アジアにある山と草原の国キルギス。この国と日本の橋渡しをしたいと活動するのが、青年海外協力隊員の石川敦子さんだ。現地の人たちと共に見つけた彼女なりの国際協力とは――。

海外で働きたい！  
新しい道に挑戦

赤いちゃんが揺れ、太鼓の音が響く。そのリズムに合わせて、みんなが輪になって楽しそうに踊っている。日本の夏の風物詩、盆踊り大会だ。

しかし、ここは日本ではない。カザフスタンやウズベキスタンなど国境を接する中央アジアの国、キルギスだ。主催したのは、首都ビシュケクにあるキルギス共和国日本人材開発センター\*。1995年に日本の支援で設立され、ビジネス人材を育成したり日本文化を発信したりと、両国をつ

なく拠点となる場所だ。「キルギス人と日本人は驚くほど見た目がそっくり。街を歩いても、外国人だと気付かれませんよ」と笑うのは、このセンターで活動する青年海外協力隊員の石川敦子さん。現地スタッフと共に、日本とキルギスの相互理解を促すイベントを企画・運営している。ビシュケクに来てもうすぐ2年。ゆくゆくはセンターを現地の人がだけで運営できるように、彼らの能力を最大限に引き出せる方法を模索してきた。

協力隊への参加を決めたのは、社会人6年目。IT関係の日本企業で営業職だった石川さんは、勤



チュイ州立学校で日本文化講座を開き、子どもたちがコップでポンゴまを作成



日本文化を紹介した同僚のカニケイさん(右)は、「子どもたちが目をキラキラさせ、日本に興味を持ってくれてうれしかった」と話す

\*市場経済に移行する9カ国にJICAの支援で設置された日本との交流の拠点。ビジネス人材の育成、日本語教育、相互理解促進が活動の3本柱。

日本文化講座で茶道を教える石川さん(左)。毎回10人ほどが参加

諸島持続開発公社に赴任した辻さんは、かつて神戸市の須磨海岸が侵食被害に遭った時のことを思い出した。あの時は砂浜に砂を大量に投入して回復させたが、侵食対策にはいくつ手法がある。まずは状況把握が大事だと、砂浜近くの海域の水深や潮の流れを調べることになった。百戦錬磨の辻さんにはお手の物、かと思いきや、日本では当たり前を使う機材や道具が何もなく。

### 景観を壊さずに防波堤をつくる

「学生時代から、自分にとって未知の世界だった開発途上国で働いてみたいと思っていました。結局地元就職したのですが、その思いはずっと持ち続けていました」。定年退職後、一念発起して30年越しの夢を実現させたのだ。

そんな辻さんには、ずっとある秘めたる思いがあった。「学生時代から、自分にとって未知の世界だった開発途上国で働いてみたいと思っていました。結局地元就職したのですが、その思いはずっと持ち続けていました」。定年退職後、一念発起して30年越しの夢を実現させたのだ。



砂浜の侵食が進んだことで高波が道路にまで達し、建物が破壊されることもある



だらかな性格の辻さん(左から2人目)はみんなの人気者。同僚たちに「もっと日本について知りたい」と頼まれ、日本語教室も開いている



沖で水深を測るには専用のソナーが必要。辻さんの指摘を受けてJICAの協力で機材を整備することになった

それでも調査をしなければ先に進めない。倉庫から使えそうなものを片っ端から引っ張り出してきた。ないなら、あるもので作ればいい。プラスチックの棒に10センチ間隔で線を引けば、水深測定用のポール代わりに。プラスチックの弁当箱に位置情報を探知する衛星機器を入れ、ブイにくくりつければ、潮の流れを測る装置に早変わりだ。

次々に飛び出す辻さんのアイデアに、「こんなやり方もあるのか」と驚くリアネさんとディアニさん。彼らにこの技術を受け継いでもらいたいと、来る日も来る日も、3人で協力して調査を重ねた。

そして2カ月後、ついに調査結果がそろった。そこで分かったのが、潮の流れは南西方向、浸食が進んでいる砂浜の北側は水深が2メートルと浅く、冬に高い波が押し寄せる可能性が高いこと。3人でどんな対策を取るべきか話し合い、今回は防波堤を設置することに決めた。「そうすれば潮の流れが変わり、砂が砂浜に戻ってくるはずだと考えました」と辻さんは話す。

さらに彼がどうしても譲れなかったのは、コンクリートではなく、砂袋を海面下に敷き詰めて防波堤を造ること。全ては美しい景観を壊さないためだ。この案には、諸

島持続開発公社の職員たちも「環境面に配慮してこそ、本当の開発ですね」と大賛成。政府からも予算が付き、工事に向けて準備が着々と進められている。

「アキオさんが来てから砂浜の侵食対策が一気に進みました。技術者として経験豊富な彼のサポートは心強い。まだまだ学びたいところがたくさんあります」とディアニさん。辻さんも「コロンビアに来て、現場を歩き、観察し、よく知るといふ基本を再認識させられました」とうれしそうに語る。これからもみんなで力を合わせて、全力でこの美しい海を守っていく覚悟だ。

浅瀬には船で入ることができないため、自分の足で海の中を歩き回って水深を測る辻さん(中央)



倉庫から集めた素材で潮の流れを調べる装置を作製。「手作りは大変でしたが、日本ではできない楽しい体験でした」

### 港湾整備のプロがカリブ海へ

青い空に向けて真っすぐに伸びるヤシの木。下に目を移せば、透き通った海が一面に広がっている。南米コロンビアの離島、カリブ海に浮かぶサンアンドレス島。絵に描いたような美しい光景の中、浅瀬では数人が何か作業をしている。物差しのように線が刻まれた棒を持ち、海の中に立てて水深を調べているようだ。

「足元に気を付けてくださいね」仲間になら声をかけているのは、シニア海外ボランティアの辻明男さんだ。この島の砂浜を守り

たい。彼らの思いは一つだ。それには理由がある。ここ数十年、島の象徴でもある美しい砂浜の砂が波に流され、徐々に失われているのだ。

「昔に比べて砂浜が狭くなった」。地元の人々はそう口をそろえる。風の強い日には、波が砂浜を越えて町に押し寄せ、道路が冠水して遮断されてしまうことも。政府も対策に動き出したが、海洋保全分野の専門家が圧倒的に不足していた。

そんな中、救世主として現れたのが辻さんだった。「彼のような経験と技術を持った人を待っていたんです」と諸島持続開発公社の



コロンビア  
from COLOMBIA

## シニア海外ボランティア

# 砂浜を守る熟練の技

南米コロンビアのサンアンドレス島。30年以上にわたり、神戸市の港湾整備を手掛けてきた辻明男さんは、この島の美しい砂浜を守ろうと奮闘している。



「新しい環境に溶け込み、自分の力を発揮できる」

人と違う経験を積みたいと協力隊に応募し、モロッコ中部の漁村スィラケディマに派遣されました。配属先は、漁業免許の登録・更新の手続きや水揚げ量の集計などを担当する漁業組合で、職員は3人だけ。書類が床や机に平積みされ、1枚の書類を探すのに全てひっくり返すという効率の悪さでした。そこで、バインダーなどを使った書類の分類やパソコンでのデータ管理を導入しようと考えました。しかし、保守的な彼らに新しい方法を押しつけても受け入れてもらえないため、毎日たわいもない会話も含めて積極的にコミュニケーションをとろう

と心がけました。そうすると次第に信頼関係が生まれ、話を聞いてもらえるようになりました。

この経験は、まさに今、日本で生きています。現在の仕事は、東日本大震災の被害を受けた宮城県女川町での復興支援。復興庁とJICAなどが連携し、協力隊経験者を被災地に派遣する制度があると知り、まさにこれがやりたいことだと参加を決めました。大学時代に専攻していた都市計画の知識を生かして鉄道の復旧を担当していますが、町とJRにはそれぞれの復興計画があります。工期や資材置き場の確保など、多くの関係者が関

わる中でスケジュールを調整しなければなりません。新しい仕事を、知らない土地で、初めて会った人と一緒に進める。実はこれ、協力隊の活動と同じ。「違う土地から来て、ここまでできるやつはなかなかいない」と地元の人に言ってもらえた時はうれしかったです。少しずつ復興が進んでいることにやりがいを感じています。

復興庁  
女川町役場  
**中谷 将さん**  
NAKAYA Masaru

パソコンを使って効率的にデータ管理ができるようになった同僚たち



座学に加え、積極的に実験も取り入れて物理の授業を行った

本社のショールームで海外向けの製品について説明する行本さん



「幅広い視野があるからこそ、良い関係を築ける」

面 白い理科の先生になりたい。大学時代にそう思い、海外経験を積もうと参加したのが協力隊でした。パプアニューギニア西部、キウガの高校に理数科教師として配属されたのですが、学校の数も先生も足りない。専攻する生徒があまりいない物理は、教科書も教材もほとんどありませんでした。ないなら、作るしかない。運動方程式や熱力学などの解説書を作ったり、ペットボトルでロケットを飛ばす実験を授業に取り入れたりと工夫しました。すると、次第に生徒たちが私の授業を楽しみに待っていてくれるようになったのです。

でも、一番変わったのは私自身かもしれません。協力隊に参加したことで、これからも世界と関わる仕事がしたいと人生を大きく方向転換。海外での売り上げが半分を占めるエアコンメーカー、株式会社富士通ゼネラルに就職し、中国や韓国と

複数の部署の担当者と、復興計画の打ち合わせをする中谷さん(右奥)



協力隊の経験、  
どう生きていますか？

JICAボランティアとして過ごした日々は十人十色。開発途上国で得た経験を糧に、今、どんな日々を過ごしているのか。それぞれの進路で活躍する3人に聞いてみよう。

株式会社富士通ゼネラル  
調達企画部  
**行本 貴司さん**  
YUKUMOTO Takashi

いった海外の取引先からの部品調達を担当しています。協力隊に参加する前と比べると、日々世界で起こっていることを気にかけるようになった自分に気がきます。また、各地に散らばった同期の隊員との交流を通じて、日本ではあまり知られていない国の知識も増えました。取引先も世界の情勢やビジネスの動きに敏感ですから、常に情報を共有し合い、良い人間関係を築いていくことが大事。お互いがwin-winとなれるビジネスにつなげていきたいと思っています。

特集 JICAボランティア  
私と世界をつなぐ道

世界銀行  
社会開発部  
**大島 かおりさん**  
OSHIMA Kaori

「現場から世界の動きまで、  
両方の視点を持てる」

文 化人類学を学んでいた大学時代、研究のためにラオスを訪問。今の生活を変えたいと真に願う人々に出会い、現地のニーズに合った支援とは何かを考えるようになりました。開発途上国の現場をもっと知らなければと、青年海外協力隊員としてニジェールへ。校舎も先生も不足している地方の村で、住民たちに学校教育に関心を持ってもらうきっかけづくりをすることに。親に学校を身近に感じてもらうため、現地の先生たちと協力し、校庭で肥料やかまど作りのワークショップを開催しました。こうした活動を通じて学んだのは、開発に地域の人々を巻き込む大切さ。でもそれだけでは十分でなく、同時に政府に働きかけて、教育制度や政策を整えていく支援も必要だと感じました。

帰国後は途上国を政策面から支えたいと、世界銀行で働いています。今、担当しているのは、世界銀行の支援するプロジェクトが各地でどう進んでいるのか、情報収集や分析をすること。海外出張もありますが、ワシントンの事務所にいることが多く、現場からは距離があるのも事実です。

そこで役立つのが協力隊の経験。例えばストライキで授業が行われないと聞くと、ニジェールで出会った先生たちを思い出します。公立の学校では給料が低かったりひどい時には支払われず、先生側にも事情があるのです。こうした実態を踏まえ、「自分のこと」として途上国の課題を捉えられるのは現場にいたからこそ。これからも現場と政策、両方の知識と経験を蓄えて開発に携わっていきます。

隊員時代 in ニジェール

村の女性たちを集め、環境問題など地域が直面する課題を話し合う大島さん(右)



パプアニューギニアへ出張し、  
地元の高校生に話を聞く





国際協力の担い手たち

# 株式会社マンダム

## 海外経験で 新しい風を起こせ

アジアでのビジネス展開に力を入れる化粧品メーカー、株式会社マンダム。  
日本でも世界でも活躍できる人材を育てようと、  
JICAの民間連携ボランティア制度を取り入れている。

新しい環境で  
自分を磨く

「自分に何ができるだろう?」  
普段、どれほどご自身に問いかけ  
る機会があるだろうか。日本で就職す  
れば、同じ言語や文化を共有しながら  
仕事ができる。しかし、異国の全く違  
う環境に放り込まれたら。違いを乗  
り越え、自分で活路を見いださなくて  
はならない。その経験は、人を大きく  
成長させるはずだ。  
これを狙いとして、JICAの民間連  
携ボランティア制度<sup>※</sup>を活用し、社員を  
青年海外協力隊員として開発途上国に  
派遣している企業がある。「ギャツビー」  
や「ルシード」といったヒット商品を



世に送り出してきた化粧品メーカー、  
株式会社マンダムだ。



インドネシアでは女性の社会進出を目指し、美容や接客などの知識を伝えるセミナーも実施している

1958年に海外に進出し、アジア  
各地で事業を展開。国ごとのニーズに  
合わせた商品を開発し、インドネシア  
では一つの商品に7種類のサイズを設  
けた。小分けにする  
ことで低価格にし、  
低所得の人でも手が  
届くように工夫した  
のだ。マンダムの海  
外市場での売り上げ  
は、全体の約4割も  
占めている。  
このようにアジア  
での事業展開を進め



グループ会社のマンダムインドネシアでは約4,500人の地元の人々を雇用

### 人を育てることは 会社を育てること

鈴木さんが派遣されたのは、カンボ  
ジアの中でも貧困層が多い南東部のス  
バイリエン州。配属先の農業局に着い  
て早々、住民の生活向上に向けて担当  
するはずだった事業が中止になったと  
知る。「これから自分で仕事を探さなけれ  
ばならず、できることは何か必死に考  
えました」。

る同社は今、どこで誰と仕事をしても、  
臨機応変に対応して成果を出せる人材  
育成に力を入れている。その一つとし  
て設けたのが、若手の社員を1年間の  
海外研修に派遣する海外トレーニー制  
度。同社の海外拠点がある国・地域に  
派遣して語学や実務経験を積む「マー  
ケティングコース」や「製造コース」に  
加え、拠点が無い国に青年海外協力隊  
員として派遣するのが「JICAコー  
ス」だ。人事部の田口逸郎さんは、「頼  
れる人間がいけない場所、自らやるべ  
きことを探して取り組むことで、仕事  
に必要な本質的な部分が見えてくるは  
ず。創造力や思考力を身に付けて成長  
してほしい」と話す。  
このコースの1期生としてカンボジ  
アで活動したのが、大阪営業所の鈴木  
貴之さんだ。「私にとって海外は未知の  
世界。営業職として4年間働き、新し  
い環境に飛び込んで視野を広げたいと  
思っていたところでした」と振り返る。



ワルンと呼ばれるインドネシアの売店では、  
小分け袋のマンダムの商品が売られている

そこで農業局の職員に聞いて回り、  
彼らを取り組んでいる事業について情  
報収集。その中で自分が力になれるか  
もしれないと感じたのが、バイオガス  
の普及プロジェクトだった。ガスも電  
気もない生活を送る人々が多いこの地  
域。家畜のふんを発酵させてガスを発  
生させる設備を各家庭に導入すれば、  
ガスで料理をしたりガス灯を利用した  
りできる。

しかし、担当の職員は事務作業に追  
われ、村をあまり訪問していないこと  
に気付いた鈴木さん。そこで、彼らに  
声をかけて導入が進んでいない村を回  
り、クメール語で住民たちと話し、バ  
イオガスにどんなメリットがあるか伝  
えた。足で稼ぐ<sup>※</sup>のは、まさに営業職  
の腕の見せ所だ。「最初はただの外国人  
として私に接していた職員たちが、一  
緒に活動するにつれて同僚として接し  
てくれるようになったのがうれしかっ  
た」と笑顔を見せる。

帰国後は、京都エリアのドラッグス  
トアを営業で回っている鈴木さんだが、  
仕事に取り組み姿勢が変わったと話す。  
「カンボジアでは住民から直接ニーズを  
聞き、どう応えるかを常に考えていま  
した。その経験から、日本でもよりお  
客様の立場に立つことを心がけるよう  
になりました」。こうした話を聞き、田  
口さんは途上国での研修の意義を確信  
した。「ただ商品売り、売り上げを伸  
ばすのではなく、お客様が本当に求め



現在、協力隊員としてフィ  
リピンで活動する「JICA  
コース」2期生の川崎弘  
助さん。トウモロコシから  
作ったコーヒーの販路開  
拓を目指す

カンボジアで協力隊員として活動した  
鈴木さん。村を回って住民がどんなこ  
とに困っているのか課題を聞き取った



ている商品を届け、喜んでもらうこと  
が営業の本来の目的。日常業務に追わ  
れるとその本質を忘れがちですが、協  
力隊の経験を生かし、業務上当たり前  
になっていたことに疑問を持ち、新た  
な提案を発信してほしい」と期待する。  
これからも、アジア各地で人々の生  
活に役立つ提案をしていきたいと考え  
ているマンダム。鈴木さんのような広  
い視野を持つ人材が、その原動力にな  
っていくに違いない。

※グローバル人材の育成に向けて、民間企業に青年  
海外協力隊を活用してもらおうと、受入国・期間、  
職種など各企業のニーズを踏まえてアレンジでき  
るオーダーメイドの派遣制度。



# 豊かなまちづくりを

JICAボランティアが派遣前に訓練を受ける長野県のJICA駒ヶ根訓練所。  
35年にわたって彼らを迎え入れてきた駒ヶ根市では、  
市民にも国際協力の輪が広がっている。

[長野県]

駒ヶ根市



## 長野県駒ヶ根市

面積165.92km<sup>2</sup>。人口約3万3,000人。JICAボランティアの訓練所の設立に伴って国際交流が活発になり、市民主体でさまざまな活動に取り組む。ネパールへの中学生の研修旅行や職員の派遣を実施し、2001年にはボカラ市と国際協力友好都市協定を結ぶ。毎年秋には地域ぐるみの国際協力イベント「みなこいワールドフェスタ」をJICAなどと共催。

## JICAボランティアのふるさと

長野県の南部、中央アルプスと南アルプスに囲まれた駒ヶ根市。登山の玄関口として毎年多くの人が訪れ、街中からふと目を遠くにやれば、白い雪を山頂に抱く雄大な景色が迫ってくる。実は駒ヶ根市は、日本の国際協力においてなくてはならない存在。なぜなら、1979年に開設したJICA駒ヶ根訓練所があるからだ。青年海外協力隊員やシニア海外ボランティアたちが、現地に行く前に派遣国の言語や生活習慣などを学ぶ場所。これまでに約1万5000人以上ものボランティアが世界各地へと飛び立っていった。

この訓練所の設立でJICAボランティアの卵たちとの交流が始まり、駒ヶ根市の人々にとって国際協力は身近なものになっていった。83年には駒ヶ根青年会議所が中心となり、「駒ヶ根協力隊を育てる会」を設立。市民から書き損じはがきや物品を集めるなどして、小さいながらもJICAボランティアを支える活動を地道に続けてきた。

その中でも大きく花開いたのが、ネパールとの交流だ。駒ヶ根で訓練を受けた青年海外協力隊員、半田好男さんがきっかけとなり、同国での識字教育などを支援するNGO「トカルバのひかり」を市民が立ち上げたのだ。また、市内の病院にネパール人医師を受け入れて医療技術の研修を行ったり、両国の市民が相互に訪問したりと、さまざま

# 国際協力で



市とJICAが地域ぐるみの国際協力について共に学ぶセミナーを開催するなど、新しい動きが始まっている



ボカラ市役所に協力隊員として派遣中の吉澤さん。この日は子どもたちとごみのリサイクルに取り組んだ

まな活動が行われている。協力隊OBでもあり、帰国後は地元駒ヶ根市職員になった塩澤真洋さんは、「訓練中は市内の農家や保育園などで活動する機会があり、地域の人々と接することも多い。その交流を通じて、自分たちも何かしたいと思う市民がたくさんいます」と話す。2001年、駒ヶ根市はネパール中部のボカラ市と国際協力友好都市として協定を締結。互いに多くの登山客が訪れる山岳観光都市として、知恵を分かち合いながら絆を深めている。

## 国際協力が市民も市も変える

今年1月には、市内の中学生8人が8日間の日程で首都カトマンズやボカラ市を訪れた。国際交流事業として95年に始まり、市内の中学生から希望者を募って派遣している。ネパールで行われている日本の国際協力の取り組みや文化の違いなどを学んでもらうのが目的だ。

「なぜ街の真ん中に牛がいるの？」  
目に飛び込んでくる景色、街のざわつき、面白い。何もかも日本とは違う。青年海外協力隊OG

が支援している女性の地位向上を目指すNGOや、駒ヶ根市の「ネパール交流市民の会」が支援した病院などを視察。ネパール人の家庭にホームステイをし、学校で同年代の子どもたちとも交流した。

「ほつぺたをくつつけるあいさつが新鮮だった」「みんなのんびりしていて、日本とは時間の感覚が全然違った」と驚きを話す子どもたち。同行した駒ヶ根市立東中学校の深谷由美子先生は、「ホームステイでは自分でなんとかコミユニケーションをとるしかなく、日本での当たり前が当たり前ではないと身を持って学べたはず。それがどんな成長につながるか楽しみです」と期待を込める。

また市の職員にとっても、ネパールは成長の舞台。駒ヶ根市は人材育成の一環として、98年からネパールに職員を派遣している。現在は、青年海外協力隊員として吉澤啓太郎さんがボカラ市役所で活動中だ。「新しい環境で試行錯誤した職員たちは、調整力、企画力、忍耐力を身に付けて帰ってきました。自分の意見をより分かりやすく相手に伝えられるようポイントを絞って話すようになったりと変化が見られます」と総務部長の原尚尚さんは話す。

そんな駒ヶ根市が最近取り組み始めたのが、訓練所を生かした新しいまちづくり。国際協力を魅力の一つとして、訓練所を中心とした、国際交流エリアの開発などを、これからの10年で推進

していく計画だ。日本全国、そして全世界へと飛び立ったJICAボランティアとのネットワークを生かし、日本の国際協力の拠点を目指していく。



開設35周年を迎えた駒ヶ根訓練所

市民主体で開かれる国際協力イベント「みなこいワールドフェスタ」では、途上国に飛び立つ前の訓練生もお手伝い



授業にはJICAが作成した開発教育教材もフル活用

知の分野。市内にあるJICA筑波の図書館に足を運ぶなどして、教室から世界について学べる内容を考えた。そこで決まった授業のタイトルは「わたしたちは地球家族」。開発途上国で何が起きているのか、日本はどんな国際協力を行っているのかについて学ぶ授業だ。

「世界の約150カ国が、途上国」と言われています」「えーっ!?!」

始まりから、子どもたちにとっては驚きの連続。現地の課題を自分のこととして考えてもらいたいと、JICA職員や青年海外協力隊の経験者を招いて話も聞いた。「もっと知りたい」。そんな気持ちで、いつの間にか教室には溢れていた。



昨年末にはそれぞれのグループで学んだことを発表。「世界には知らないことがたくさん!」

そこで次は、医療・水・衛生、食料、学校、紛争など、グループごとにテーマを決めて調べてみることに。「環境破壊は僕たちの生活にも原因があるんだね」「子どもが戦争で戦わないといけないの?」「学校に行けるのは当たり前だと思ってた」。ふたを開けると、そこは知らないことだらけ。授業を重ねるごとに、遠く離れた途上国で暮らす人々たちへの思いが強くなっているように見えた。

**みんなに広めて 行動につなげよう**

6年生も終わりに近づいたこの日、「つくばスタイル科」の授業のまとめとして新聞作りに取り組みすることになった。これまで学んできたことを、全学年の子どもたちにも知ってもらいたいためだ。「何かしたいな」と思ってもらえるようなメッセージを輝かせる。

将来、国際協力の道に進むかは分からない。それでもこの授業を通じて世界の問題を知り、日本での生活を振り返り、今できることを自分の頭で考えてほしい。それこそ、子どもたちに期待していることだ。「途上国について知ることが私たちも楽しい。子どもたちと一緒に勉強していきたいと思っています」と、6年生の先生たちは話す。桜南小の国際協力はまだ始まったばかりだ。

書きたいことが盛りだくさんで、この日は完成まではいかなかった新聞作り。

「学校に行けない子どもたち」について調べた照井大和くんは、「先生もいない、教科書もない子がいることを伝えたい」と真剣なまなざし。「食べ物も十分ない人もたくさんいるのに、僕たちが好き嫌いしたらいけないよね」。そう話しているのは、食料問題を担当した高橋悠太郎くんのグループだ。

どのグループも、書いては消し、書いては消しの繰り返し。2時間連続の授業だったが、休み時間も席を立たずに、手元の紙にらめっこしていた。「自分で調べて考えることで、今の生活が幸せだとより実感することが出来ます。自分たちももっとがんばらなければと感じているようです」と坂本先生。「家の近くにフェアトレードのチョコレートを買える店を見つけました。身近なところできるところを探したい」と、山本さくらさんは目を輝かせる。

子どもたちが懸命に考えたメッセージは、きっと多くの人の心に響くはず。この街の未来を担い、日本も世界も元気にする子どもたちが、「つくばスタイル科」を通じてたくさん育ってくれることを期待したい。

「この資料を使えばいいんじゃない?」自分で考えることが行動につながる



毎週火曜の5、6時間目は、通称「つくスタ」の授業

## “つくばスタイル科”で国際協力!

国や企業の研究機関が集まる茨城県つくば市。小中一貫教育の特色の一つとして市が導入したカリキュラム「つくばスタイル科」に国際協力について学ぶ授業を取り入れたのが、つくば桜並木学園つくば市立桜南小学校だ。



授業で子どもたちがまとめた資料



国際協力について学んだことを新聞にまとめる子どもたちと坂本先生

世界とつながる 教室



パナマの障害者やその家族を対象にキーホルダーの作り方などを教え、社会参加を後押しするJICAボランティアの活動現場を視察

## ボランティア活動の武器となる 技術を身に付けてほしい

JICAボランティアの活動を支える青年海外協力隊事務局。環境問題の解決に挑むボランティアをサポートする中村史さんは、彼らの活動の幅を広げるための研修にも力を入れている。

### シルクロードの世界に 魅了される

小学生のころ、シルクロードを旅するテレビ番組を見ていて、現地の人たちの暮らしや活気あふれる市場など、日本とは違う生活に興味を持ちました。大学時代には東南アジアやヨーロッパなどを回り、3年生の時には、タイ北部に暮らす少数民族の暮らしを間近で見てみたいと、NGOで3カ月間のボランティアに参加することに。学生寮で暮らす子どもたちが勉強に専念できるよう、食事の管理や掃除などを手伝いました。しかし、その地域には中学校や高校に行けない子どもも多くいました。家のお手伝いをしなければならなかったり、学費を払えなかったり……。みんなが学校に行けるようになるためには、親に教育の重要性を分かってももらい、収入を増やすための支援が必要なのではないか。一度は貿易会社に就職したもののその思いが消えず、JICAに転職しました。

### 議論が円滑に進むよう 陰から支える

2007年からはヘルー事務所へ。経済発展に伴い環境問題が深刻化していたため、環境省が新設されたところでした。まず同省が取り組もうとしていたのがごみの問題。当時、国内に衛生処分場が不足し、ごみ捨て場にはむき出しのごみが放置されていました。



そこで、日本の協力を得てごみ問題を解決できないかと要請があり、環境分野の協力を担当していた私も話し合いに参加することになりました。衛生処分場の普及による環境改善を目指す環境省、ごみの収集に苦戦する地方自治体など、多くの関係者が集まり、どう取り組むのがベストなのか検討が始まりました。私も関係者に毎日会って議論を繰り返して、ごみの運搬やリサイクルなど、項目別に問題を話し合う場を設けるなどして調整を図りました。

1年かけて方針を固め、衛生処分場の建設だけでなく、回収、運搬、リサイクルの促進など、包括的な廃棄物管理を全国規模で進めることになりました。その次に取り組んだのが住民たちへの啓発活動です。ごみの処理には彼らの協力が不可欠。ごみの回収やリサイクルの重要性を住民や子どもに伝えるJICAボランティアを、それぞれの村に派遣しました。

### ボランティアの 現場の力を引き出す

帰国後は青年海外協力隊事務局に配属になり、再びヘルーのボランティア派遣を担当することになりました。引き続きこの国に関われることをうれしく思っています。

ヘルー以外にも、中南米で環境問題の解決に取り組むボランティアをサポートしていますが、特に力を入れているのが技術研

JICA青年海外協力隊事務局  
中南米課

**中村史**  
NAKAMURA Fumi

大学院卒業後、貿易会社に就職。退職後、2002年にJICAに就職。JICA中国、農村開発部、ヘルー事務所を経て、2011年7月から現職。

修。環境先進都市である北九州市の関連団体に協力を得て実施しています。物が限られている途上国で、もみ殻や果物の皮など、現地で手に入るもので生ごみを分解して堆肥を作るコンポ



ヘルーの農家の生計向上を目指して農業機械を導入

ストの活用法はぜひ学んでほしい。住民たちの信頼を得て、活動の幅を広げるきっかけになると考えているからです。

そうして送り出したボランティアからは、「同僚が協力してくれない」など、悩み相談を受けることもあります。そこで中南米地域で活動するボランティアとその同僚を対象に、北九州市の専門家が直々にコンポストの技術や環境教育の成功事例などを共有する研修を定期的に実施しています。「同僚の理解が深まり、やる気を見せてくれるようになった」と言ってもらえた時はほっとしました。「途上国の役に立ちたい」という思いを持って活動するJICAボランティアの力になれるよう、これからも全力でサポートしていきます。

## アフリカの女性起業家を支援するシンポジウム開催

01



会場ではアフリカの女性たちの色鮮やかな民族衣装が映えた



パネルディスカッションに参加する南アフリカのカリさん、日本の渡辺さん、アメリカのオハジュルカさん

2013年6月に横浜で開催された第5回アフリカ開発会議（TICAD V）で発表された日本の支援策の一つ、「日アフリカ・ビジネススウーマン交流プログラム」の第一弾として、1月26日から2月6日にアフリカ7カ国から14人の女性起業家らを招き、「アフリカ女性起業家支援セミナー」が開催されました。参加者は横浜市や相模原市、広島県などの行政サービスや女性起業家同士の相互サポートの事例を視察し、地域に根差した日本の女性起業家と意見交換を行いました。

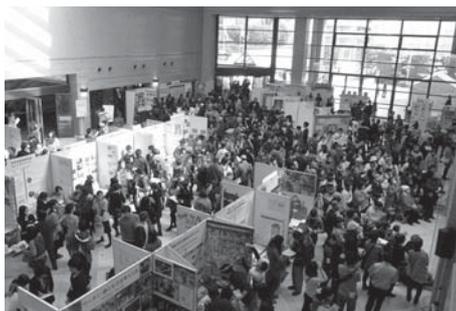
2月3日には、このセミナーの総括および対外発信の機会としてJICAと横浜市が「アフリカの輝く女性とともに成長を」をテーマにしたシンポジウムを共催。冒頭であいさつした田中明彦JICA理事長はケニアでの農業支援プロジェクトを取り上げ、「ジェンダーの視点を大事にしなからアフリカ10カ国に展開していく」と紹介。基調講演では、林文字横浜

市長がビジネスに女性が参画する意義を強調し、キャロライン・ケネディ駐日アメリカ大使も「女性のエンパワーメントを優先課題に掲げる日米で連携していく」と述べました。日本企業によるアフリカでのビジネス事例として紹介されたのは株式会社サカタのタネ。JICAとの連携で進めるBOPビジネスとして、南アフリカの農村で野菜栽培技術の研究を実施しています。田崎正光取締役は「農村の女性起業家を支援していきたい」と話しました。

シンポジウム後半には、エチオピア、タンザニア、南アフリカ、アメリカ、日本の女性起業家によるパネルディスカッションが行われ、起業の経緯やビジネスを通じて目指しているものなどを紹介。ほぼ全員が資金へのアクセスを課題に挙げ、南アフリカのボンゲウエ・カリさんは「困難はありますが、私たちのビジネスで国を変え、可能性を花開かせましょう」と力強く呼びかけました。

## 大阪で「ワン・ワールド・フェスティバル」開催

02



NGOなどのブースが並び、多くの来場者でにぎわった

1993年から毎年開催されている西日本最大の国際協力イベント「ワン・ワールド・フェスティバル」。今年も2月1日、2日の2日間、大阪国際交流センターで開催され、約1万7500人が来場しました。

会場内には、150近くのNGO、政府機関、国際機関、教育機関、企業など、多種多様な団体が出展しました。各ブースで開発途上国の課題解決に向けた取り組みを紹介した他、ワークショップやセミナー、講演会など、国際協力に触れるさまざまな機会を提供していました。

大ホールでは、「なんとかしなきや！プロジェクト」メンバーであるタレントのルー大柴さんが登場。昨年8月に訪問したフィジーの現状や現地で活躍する日本人の姿などを報告し、日本の国際協力の重要性を分かりやすく来場者に伝えました。

## 「世界の笑顔のために」プログラム 物品募集中

03



マラウイに届けられた鍵盤ハーモニカ

「私はもう使わないけど、まだ使えるな」。そんな物品があったら、「世界の笑顔のために」プログラムに参加してみませんか？

教育、福祉、スポーツ、文化などの分野で、開発途上国で必要としている物品を日本国内で募集し、JICAボランティアを通じて各国に届けるこのプログラム。個人でももちろん、学級活動の一環や、企業、地域で集めるなど、参加の形はさまざまです。

なわとびやバスケットボールなど、あなたの身近にあるものが国際協力の一歩になります。たくさんのご応募をお待ちしています。

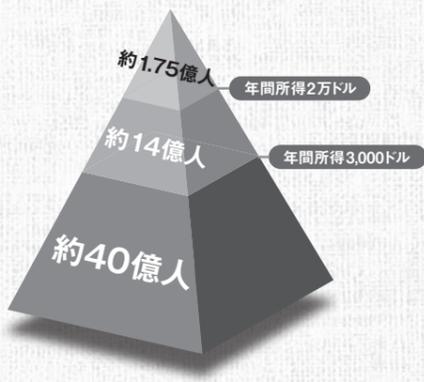
【参加申込書受付期間】4月1日（火）～5月9日（金）

【問い合わせ】青年海外協力隊事務局「世界の笑顔のために」プログラム係

【TEL】03-5226-9196  
【URL】www.jica.go.jp/partner/smile/

# 世界を変える BOPビジネス

ジャーナリスト  
田原総一郎



## ピラミッドが示す 新たな市場

私が最初に「BOP」という言葉を聞いたのは、今から4年ばかり前である。

BOPとは「Base of the Pyramid (ベース・オブ・ピラミッド)」の頭文字で、つまりピラミッドの底という意味なのだという。そしてこのBOPが、世界の経済や文化の壮大な未来を描くのだと聞いて非常に興味を持った。

そこで私は、経済産業省の「BOPビジネス政策研究会」の担当者である小山智氏(当時、貿易経済協力局通商金融・経済協力課長)を訪ねて話を聞いた。

小山氏は、まず私に大きな三角形の図を示した。実はこれがピラミッドであり、その上部に二本の横線が入っている。

一番上の部分はいわば世界のお金持ち層で、

るものとして「ベース」と呼ばれるようになったのだそう。

BOP層の平均年収は30万円以下。これまではマーケットとして見られてこなかった。アジア、アフリカ、南米などに多くあつて、世界の人口の約7割を占めている。そのBOPが、マーケットになり始めた。しかし当時の日本では、まだそこまで認知されていなかった。

## 日本人が展開する 途上国ビジネス

そのBOPでいち早く市場をつくり、ビジネスを展開している日本人女性がいる。

山口絵理子。彼女はバングラデシュのジュートと呼ばれる麻を素材としてバッグを作り、日本で販売しているのである。それにしても、なぜ彼女がバングラデシュと結びついたのか。彼女は慶應義塾大学で竹中平蔵教授のゼミを受け、「世界には裕福な国と、貧しい国とがあるが、なぜそんな差が生じるのか」と強い疑問を抱き、それを自分の目で確かめるためにアジアの最貧国といわれるバングラデシュに飛び、現地の大学院で勉強したのだという。

山口氏はそこで初めて、バングラデシュにはジュートという特産物があるのだが、欧米の先進国に素材として安く買いたたかれ、バッグなどに加工されて高く売られていることを知った。そこでバングラデシュ国内でバッグを作り、日本などに販売することを思いついた。苦労はあつたようだが、今や、「マザーハウス」とい

アメリカや日本、そしてヨーロッパの先進国などが含まれているトップゾーンだ。その人口は約1億7500万人。この部分が、従来のいわゆるマーケット(市場)と呼ばれている層で、トヨタやソニー、パナソニックなど日本のメーカーは、これまでこのマーケットを中心にビジネスをしていた。

しかしこのマーケットは、今やすっかり縮小してしまつた。それに対して急速に勢いづいているのが、ミドルゾーンといわれるピラミッドの中間、約14億人のマーケットだ。中国、ブラジル、ロシア、インド、オーストラリアなどで、このマーケットでの商戦の優劣が景気に大きな影響を与えている。

そして、小山氏は真ん中の線より下部を指して、「ベース・オブ・ピラミッド」と言つた。彼の話では、当初は「ボトム」と言つていたのだが、底辺ではなくピラミッドの基盤を意味する

うブランドとして確立している。

また、大和証券がBOP支援として債権の販売を行っている。この債券を企画し、開発の中心的役割を果たしたのは、当時まだ30代の山本聡という商品企画部長だった。

BOP層の子どもたちは、ワクチン1本さえあれば助かるケースが多いが、それさえ行き渡らないのが現実だ。そこで国連機関や有志の財団などが資金を出し合つてワクチンの配布を支援しているのだが、何とんでも資金が集まるのに時間がかかる。しかし今日も明日も、できるかぎり早く、ワクチンを必要などところに届けたいところだ。

そこで「ワクチン債」という債権を発行して、先進国の人々に買ってもらう。「マイクロファイナンス・ファンド」であり、元金も確実に返ってくる。いわばワクチンを「ビジネス」にしてしまったのだ。だから、ニーズとシーズに大きなギャップが生じないと山本氏は説明する。

BOPビジネスを広く世界に提唱したのは、アメリカの経済学者C・K・プラハラード博士だ。すでに1990年代に、世界のヒエラルキーの最下層の人々を、ビジネスの力で貧困から救い出すことが可能であると説いていた。企業はBOP層を被害者として捉えることをやめて、快活かつ創造的な起業家として、あるいは価値を求める顧客として捉えるべきだと主張していた。

それから10年以上たった今、大小を問わず世界の多くの企業がBOPビジネスに参入し活躍する時代が到来した。

### <Profile>

たはら・そういちろう

1934年滋賀県出身。64年に東京12チャンネル(現テレビ東京)に入社。77年にフリーに。「朝まで生テレビ!」(テレビ朝日系)、「激論!クロスファイア」(BS朝日)の司会をはじめ、テレビ・ラジオの出演多数。早稲田大学特命教授、「大隈塾」塾頭も務める。著書に、「誰も書かなかった日本の戦争」(ポプラ社)、「大転換「BOP」ビジネスの新潮流」(潮出版社)など。



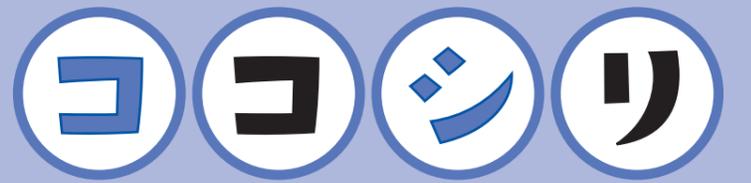
バングラデシュの首都ダッカの街並み。高層ビルの対岸には、スラムが広がっている(撮影:鈴木革)



バングラデシュで安全な水の普及を進めるのは日本ベネッセ株式会社(撮影:鈴木革)



味の素株式会社は、ガーナの子どもの栄養改善のためサプリメントを開発



「ココが知りたい」。国際協力に関係する  
いろんなトピックを分かりやすく解説します!

1 月9～15日、安倍晋三内閣総  
理大臣はアフリカ3カ国とオ  
マーンを訪れました。  
日本の総理として24年ぶりに訪問  
したオマーンでは、カブース国王と  
会談。石油・天然ガスの安定的な供  
給を働きかけるとともに、エネルギ  
ー分野で協力を強化し、電力・水力  
などのインフラ整備を通じて貢献し  
たいと述べ、連携強化を訴えました。  
アフリカ歴訪の最初の国はコート  
ジボワール。日本の総理大臣として

初めて同国を訪れた安倍総理は、ウ  
ワタラ大統領に対して、インフラ  
産業・人材育成、投資促進などの協  
力を本格化する旨を表明。日本が支  
援している女性職業訓練施設「マリ  
ー・ウジエニー・センター」も訪れ  
裁縫の授業などを見学しました。  
同国を含めて3億人の人口を抱え  
る西アフリカ15カ国は、西アフリカ  
諸国経済共同体を設立して経済統合  
を進めています。その議長を務める  
ウワタラ大統領の呼びかけで、周辺  
10カ国の首脳も集結。インフラ整備  
や人材育成などについて活発な議論  
が行われ、日本と西アフリカ諸国と  
の関係強化につながりました。  
続いて訪れたモザンビークも、日  
本の総理が訪れるのは初めて。天然

ガスや石炭といった豊富な天然資源  
を生かした産業振興を日本が支援  
し、国民の生活向上に貢献していま  
す。今後5年間の取り組みとして、  
300人以上の人材育成の他、ナカ  
ラ回廊地域の開発に対する約700  
億円の支援を表明しました。  
最後に訪れたエチオピアでは、ア  
フリカ連合の本部からアフリカ諸国  
へメッセージを発信。同国を中心に  
広まりつつあるカイゼンの実例を挙  
げながら、人材を最も貴重な資源と  
捉え、一人一人の創意工夫を大切に  
する日本の支援や日本企業の組織文  
化こそ、アフリカに必要なであると日  
本の強みをアピール。これからも著  
しい経済成長を遂げるアフリカとの  
関係強化を目指していきます。



モザンビークのケブーザ大統領と会談する安倍総理

ODA政策

### 「安倍総理のアフリカ・中東訪問」 トップレベルの交流で 関係強化を目指す

毎月、精力的に世界を飛び回る安倍晋三内  
閣総理大臣。1月には中東・アフリカ諸国と  
の関係強化を見据えて、4カ国を歴訪した。

〈今回の訪問国〉



コートジボワールでは職業訓練施設を視察し、現地の女性たちに激励の言葉をかけた



共同声明署名式に臨む安倍総理とシン首相



女性の管理職を増やす政策などについて女性リーダーたちと意見交換

1 月25～27日、安倍晋三内閣総  
理大臣はインドを訪問しまし  
た。インドにとって最も重要な祝日  
である共和国記念日の記念行事に、  
日本の総理大臣が初めて主賓として  
招待されたものです。  
シン首相との会談で安倍総理は、  
インドの発展は日本にとっても利  
益があり、今後もODAを活用した  
インフラ整備や貧困削減などの支援  
を行っていく」と述べ、テリーメト  
口の延長など3件、総額約2000  
億円の円借款供与を決定したことを  
伝えました。また、テリーとムンバ  
イを結ぶ貨物専用鉄道建設計画な  
ど、大規模なインフラ整備の進捗を

ODA政策

### 「安倍総理のインド訪問」 さらなる発展を目指して 深まるパートナーシップ

確認し、今後も前進させることで一  
致。会談後には「日インド戦略的ゲ  
ローバル・パートナーシップの強化  
」と題した共同声明に署名しました。  
また、高度な技術を持つ日本企業  
や両国の研究者が参加した科学技術  
セミナーでは、日本の技術がインド  
の経済成長・社会発展に貢献し、日  
本企業のビジネスチャンスにもつな  
がることに期待が寄せられました。  
さらに、インドの各界で活躍する女  
性リーダーとも交流し、インドにお  
ける女性の社会進出の現状などにっ  
いて意見交換を行うなど、幅広い分  
野で、両国の関係を一層深める訪問  
になりました。

## Message from Solomon Islands ソロモン諸島と共に歩む



日本の協力でアウキ市に完成した桟橋



緊急援助物資引渡し式の様子

在ソロモン日本国大使館 小幡ひとみ 専門調査員  
1 太平洋に浮かぶソロモン諸島  
は、1978年にイギリスか  
ら独立しました。日本政府はその即  
日に外交関係を樹立し、空港、電力、  
橋、市場、上水道といった基幹インフ  
ラの整備、水産振興、マラリア対策、  
防災、草の根無償資金協力、青年海外  
協力隊の派遣などを進めてきまし  
た。90年代後半からの部族抗争によ  
る治安悪化で支援はいったん停止さ  
れましたが、抗争終結後の2004  
年に再開されています。  
日本と同じく環太平洋火山帯に位  
置する地震多発国で、最近では20  
13年2月6日、マグニチュード8・  
0の大地震が南東部のテモツ州で発  
生。日本政府はソロモン諸島政府か  
らの要請を受け、1000万円相当  
の緊急援助物資（毛布、ポリタンク、  
浄水器）を供与しました。  
2013年5月には4年ぶりに  
日・ソロモン経済協力政策協議が実  
施されました。また日本企業がニツ  
ケル鉱山の開発を進めており、経済  
関係の一層の緊密化が期待されてい  
ます。日本の支援がソロモン諸島の  
持続的発展と国民の生活水準向上に  
資するよう、また二国間の友好関係  
のさらなる発展に向けて、オールジ  
ャパンでの挑戦が続きます。

現地からのメッセージは、ODAメールマガジン(www.mofa.go.jp/mofaj/gaiko/oda/mail/)でご覧いただけます。

イスラム教の安息日の金曜日。ビーチはカラフルに彩られている。数年前には想像できない光景だ(2013年)

地球ギャラリー vol.66

# Somalia

[ソマリア]

写真・文=下村靖樹(ジャーナリスト)



# 動き出した時間



モガディシウ沖を航行する船舶を海賊から守るためパトロールに出る兵士



政府軍兵士として戦う17歳(当時)の少年。生まれてから一度も、戦争のない世界を経験したことがない



栄養失調の検査を受ける子ども。世界保健機関(WHO)の指針では、二の腕の外周が115ミリ以下は深刻な栄養失調とされている

見事なスカイブルーの空からギラ  
ギラと太陽が照りつけ、体中から汗  
が噴き出してきた。レンズ越しに見  
えるのは、穏やかな波が打ち寄せる  
インド洋。ソマリアの首都モガディ  
シウで最も人気があるリド・ビーチ  
は、多くの笑顔で溢れていた。水を  
かけ合いはしゃぐ少年たち、デート  
中のカップル、新鮮なシーフード料  
理に舌鼓を打つ家族―。

よみがえり、私は目の前の光景が現  
実だと簡単には信じられなかった。  
1960年に独立を果たしたソマ  
リア。しかし国民は「ソマリア国民」  
であることよりも、綿々と受け継が  
れてきた「氏族」への帰属意識の方  
が強く、独立後、特定氏族の優遇や  
汚職がまん延した。それに対し冷遇  
されていた氏族たちは、隣国エチオ  
ピアとの領土紛争を機に反政府活動  
を活発化。91年に首都は陥落したが  
新たな政権を担える勢力は台頭せ

ず、無政府状態となって泥沼の内戦  
へと突入していった。  
2002年、9・11テロの首謀者  
とされるウサマ・ビン・ラーディン  
が潜伏しているとの噂を追い、初め  
て足を踏み入れたソマリアは内戦真  
つただ中。想像を超えるカオスだっ  
た。目に映る全ての建物に銃弾や砲  
弾の跡が残り、大砲を取り付けた武  
装車両がそれぞれの氏族の民兵を乗  
せ、猛スピードで走り回っていたの  
だ。

地球ギャラリー vol.66

撮影：2002年、2010年、2011年



干ばつによる飢餓から逃れ、避難民キャンプで暮らす子どもたち



武装車両に取り付けられた対空砲を操る有力氏族の少年民兵



銃弾と砲弾で蜂の巣になった首都モガディシウ中心部の民家

急速に整備された携帯電話回線。  
データ通信も高速化し、スマートフォンが爆発的に普及している



イタリアの影響力が特に強かった  
ジョハール地域では、今も主食は  
パスタ。避難民キャンプでもパスタ  
マシーンは必須だ



サッカーに興じる子ども  
たち。2002年の初訪問  
時にも、この空き地では  
同じ光景が見られた



モガディシュの旧ソマリア中央銀行の屋上から望む海岸沿いのクルバホテル。内戦前は国内最高級ホテルだった

間断なく空に響く乾いた銃声。そこはまるで戦国時代。21世紀にこんな国が存在しているのが驚きだった。

22年ぶりに「ソマリア連邦共和国」として、国としての再出発を果たしたのだ。しかし、長年の内戦により受けた傷を癒やすのは簡単ではない。難民として長期間国外で生活していた人もいれば、国内で紛争に耐え続けて

いた人もいる。国の機能のほぼ全てが集中する首都と、基盤が脆弱な地方との格差は、今後深刻な問題になってくるだろう。日が傾き始めたころ、風が強くなってきたインド洋を背景に、慣れない手つきでカメラを構える父親と、母

親に寄り添い、少し照れながらポーズを取る子どもたちの姿があった。日本にいる我々には想像できない苦しい生活を耐え続けてきた人々。彼らこそが、そんなありふれた日常の光景を、この国全体に広げられると信じた。



1万3,000人が暮らす南部のジョハール避難民キャンプの夕暮れ



洪水で水没した幹線道路の状況を確認する兵士たち

## 女性のおしゃれといえば

### ヘナペイント

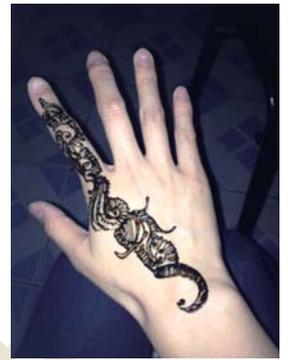


カラフルなスカーフをまとったソマリアの女性たち (撮影：瀧野恵太)

ソマリアに暮らす人々のほとんどがイスラム教徒。戒律上、女性が肌を露出することは禁じられており、スカーフをかぶって髪を隠し、ゆったりとした服で全身を覆っている。しかしそれでも、服装にはそれぞれの個性が見られ、スカーフはピンク、赤、青、黄と色鮮やか。世界のどこでも、女性はおしゃれが大好きなのだ。

中東やインドなどでよく見られるヘナペイントも、ソマリアの女性にとっておしゃれの一つとして人気。ヘナという植物をペーストにしたものを使い、熟練の絵師が下書きなしに手や足に細かな模様を描いていく。20分ほど放置して色をなじませ、ドライヤーを使うなどして十分に乾かしたら、後は洗い流すだけ。2週間から長ければ1カ月は美しい模様を楽しむことができる。

このヘナペイントは、実はそもそも“おまじない”のために使われてきたもの。ヘナには神の恩恵が宿っているため願いをかなえてくれると伝えられてきたからだ。今でも安産祈願を込めて、「元気な子どもが生まれてくるように」と、妊婦のおなかに模様を描くこともあるそうだ。



茶色いヘナのペーストで模様を描き...



乾燥させてからペーストを洗い流すと、肌に模様が残る

## 地球ギャラリー

### ソマリアの文化を 知ろう!

取材協力：日本ソマリア青年機構

1960年に独立するまでの約80年間、北部はイギリス、中南部はイタリアの統治下に置かれていたソマリア。その影響で、今でも南部ではイタリアから伝わったパスタが主食としてよく食べられている。

中でも定番は、ミートソースを意味する「サラダート」と呼ばれるパスタ。日本と違うのは、ソースにラクダの粗びき肉を使っていること。ソマリアは世界で最も多くのラクダを飼育しているといわれ、古来より移動手段として、ミルクや肉は食用と

して重宝されてきた。そして、味の決め手はスパイス。クミンやカルダモンなど多種多様なスパイスを混ぜた調味料「ハワシュ」は家庭料理に欠かせない。

ソマリアでは、この「サラダート」を食べる時にフォークではなく手を使うのが一般的。手首をくるくると回しながら器用に指に巻いて食べるという。そして、主要な輸出品として栽培されているバナナをちぎって一緒に食べるのがソマリア流。甘みが増しておいしいとか。

## ソマリア料理といえば ラクダのミートソースパスタ

### サラダート



#### 【RECIPE】

##### ●材料(4人前)

タマネギ1個/ピーマン2分の1個/ニンニク4片/オリーブオイル2分の1カップ/牛ひき肉900g/トマト缶2個/トマトペースト大さじ2/ハワシュ※大さじ1/砂糖大さじ1/コリアンダー(みじん切り)少々/黒コショウ小さじ1/パスタ400g

- 1 タマネギ、ピーマン、ニンニクをミキサーにかけてペースト状にする。
- 2 鍋にオリーブオイルを入れて中～強火にかけ、①を加えて2分炒める。牛ひき肉を加え、ふたをして10分煮詰める。
- 3 水分がなくなってきたら、トマト缶とトマトペースト、ハワシュを加えてよくかき混ぜ、さらに砂糖を加えたら、ふたをして中弱火で45分煮込む。
- 4 油が表面に浮かび始めたらコリアンダーと黒コショウで味を調え、ゆでたパスタと絡めたら出来上がり。

##### ※ハワシュを作ろう!

材料：クミン(粒) 小さじ3/黒コショウ(粒) 小さじ2/カルダモン(粒) 小さじ1/ターメリック(パウダー) 小さじ1/サフラン3本/クローブ(粒) 2個  
作り方：粒のスパイスは香りが立って表面に焼き色がつくまで軽く炒り、冷まして細かくパウダー状に砕く。材料を全て混ぜ合わせれば完成。

# イチャオシ!

## M OVIE

### 『怒れ! 憤れ! -ステファン・エセルの遺言-』

第二次世界大戦を生き延びた93歳の元レジスタンス運動家、ステファン・エセル。彼が生前に出版した『怒れ! 憤れ!』は世界30カ国で翻訳された。「世の不正義に目をつぶるな」という彼の言葉は多くの若者の心を動かし、貧富の差、失業率の高さなど、現代社会の閉塞感に対する不満が爆発。ヨーロッパ各地、そして中東で大規模な大衆運動が広まった。この作品では、アフリカから夢を求めてヨーロッパにたどり着いた少女の視点から、ステファンに影響を受けた運動のうねりを見つめ続ける。厳しい移民規制の網をすり抜けながら、デモに揺れるギリシャ、フランス、スペインと、明日をつかむためにさまざま彼女の未来とは。(文=高倍宣義)



© Prince Production

2012年/フランス/88分

監督: トニー・ガトリフ

出演: ベティ、イサベル、フィオナ・モンベ他

公開: 3月1日(土)よりK's cinema(東京)他、全国順次公開

URL: [www.moviola.jp/dofun/](http://www.moviola.jp/dofun/)

配給・問: ムヴィオラ TEL: 03-5366-1545

## E VENT

### 『第7回アフリカンフェスティバル よこはま2014』

昨年、第5回アフリカ開発会議(TICAD V)が開催された横浜で、日本とアフリカの懸け橋をコンセプトにしたイベントが今年も開催される。アフリカ各国の情報満載の大使館コーナーや写真展の他、現地の音楽や踊りが披露されるライブパフォーマンス、民族楽器のジャンベやダンスを体験できるワークショップ、民族衣装のファッションショーなど、子どもから大人まで楽しめる催しが盛りだくさん。アフリカの手工芸品や衣料品、食品を販売するマーケットやフードコートもあり、アフリカをまるごと満喫できる。

会期: 4月4日(金)~6日(日) 11~19時(最終日は17時まで)

会場: 横浜赤レンガ倉庫1号館

URL: [africanfestyokohama.com/](http://africanfestyokohama.com/)

問: アフリカンフェスティバルよこはま実行委員会事務局

TEL: 045-317-7890

## B OOK

### 『世界のともだち』

海外に暮らす子どもたちは、どんな生活をしているのだろうか。そんな疑問に答えてくれるのが『世界のともだち』シリーズ。世界36カ国にカメラマンが飛び、現地に出会った子どもを写真付きで紹介。「サッカーより女の子としゃべるのが好き」と陽気に話すのはブラジルのミゲルくん。モンゴルのバタナーくんは馬や羊、ヤギなどを育てながら大草原を駆け回り、ケニアのアティエノちゃんは、家に水道がないため池で食器や洋服を洗っている。どんな状況で暮らしていても、子どもたちの笑顔は宝物。本書から“世界のともだち”を探してみよう。



この本を  
1人の方に  
プレゼント  
詳細は  
38ページへ

長倉洋海 他 写真・文  
借成社  
1,890円(税込)

## B OOK

### 『地球日記3 沖縄発JICAボランティア』

“うちなーんちゅ”が世界に挑む。沖縄出身のJICAボランティア67人の参加の経緯や現地の活動の様子などをまとめたのが本書。インドネシアに派遣された鈴木梨恵さんは、現地の人々が自分の民族に誇りを持っていることに沖縄に似た郷土愛を感じ、シニア海外ボランティアの小波陽善さんは、エクアドルでごみの分別に取り組んだ。上江洲りべかさんはウガンダの子どもたちに「将来の夢は?」と聞かすが、その答えは意外なものだった…。一人一人のエピソードからJICAボランティアの等身大の姿が見えてくる。



この本を  
1人の方に  
プレゼント  
詳細は  
38ページへ

JICA沖縄 編  
沖縄タイムス社  
1,500円(税込)

日本人の軌跡を残すJICAボランティア

JICAは、日本人専門家の派遣や研修員受け入れなどの技術協力、橋や港、学校の建設などに必要な資金協力とともに、政府開発援助(ODA)の重要な柱の一つとしてボランティア事業も実施しています。

特に中米や大洋州は、歴史的にODAに占めるボランティア派遣の割合が他の事業を大きく凌いできた地域です。「日本の協力」ボランティア事業による協力のイメージが定着している国もあります。

JICAボランティアは、開発途上国からの要請に基づき、その国の地方部などに派遣されています。日本の協力は、中央政府だけでなく、遠隔地のコミュニティで暮らす人々のところにも届いているというイメージの象徴でもあります。

また、現地の人々に「技術」を伝えるだけではなく、日本人の「価値観」や「精神」といったものまで伝達される事業です。かつて青年海外協力隊員が派遣されていた村落を訪問すると、名前は忘れていても、その日本人が勤勉で責任感を持ち、時間に正確だったという印象を忘れず持っている村人たちに出会って感動することがあります。

JICAは、ボランティア事業をODAの戦略の中に取り込んでいる世界でも数少ない援助機関の一つです。JICAのビジョンである「すべての人々が恩恵を受ける、ダイナミックな開発」を進める上で、JICAはこのユニークなボランティア事業をさらに効果的に活用していく努力を継続するとともに、この事業が市民の皆さま一人一人の参加に支えられていることを認識しつつ、より開かれた事業となるよう尽力してまいります。

JICA広報室参事役 那須隆一

本誌へのご意見・ご感想や  
JICAへのご質問を  
お寄せください。

プレゼント  
付き

添付のアンケートはがき、Eメール、FAXから、本誌に対するご意見やご感想、またJICAへのご質問を、氏名・住所・電話番号・職業・年齢・性別・ご希望のプレゼントを明記の上、お送りください。ご記入いただいた個人情報統計処理およびプレゼント発送以外の目的で使用いたしません。当選者の発表は発送をもってかえさせていただきます。

◎応募締切：2014年4月15日

Eメール: [jica@idj.co.jp](mailto:jica@idj.co.jp)  
FAX: 03-3221-5584 (『mundi』編集部宛)

- ① モンゴルのフェルト製品
- ② 書籍『世界のともだち』(p37参照)
- ③ 書籍『地球日記3 沖縄発JICAボランティア』(p37参照)

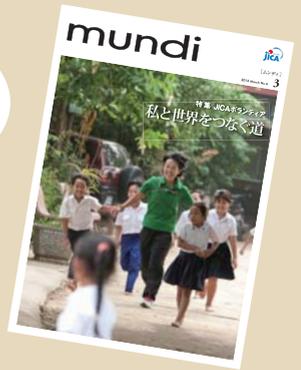


本誌をご希望の場合は  
下記方法で  
お申し込みください。

申込方法

本誌をご希望の方には、送料をご負担いただく形でご送付いたします。巻末の払込取扱票に、氏名・住所・電話番号・ご希望の送付期間・送付開始月を明記の上、指定の金額を郵便局でお支払いください。入金確認後、発送手配をいたします(入金から1週間程度かかることもありますのでご了承ください)。複数冊、またはバックナンバーをご希望の方は送料が異なりますので、下記までお問い合わせください。

申込先 (株)国際開発ジャーナル社 総務部(発送代行)  
住所 〒102-0083 東京都千代田区麹町3-2-4 麹町HFビル9F  
TEL 03-3221-5583  
FAX 03-3221-5584  
Eメール [order@idj.co.jp](mailto:order@idj.co.jp)



次号予告 (2014年4月1日発行予定)

ミレニアム開発目標 (MDGs)

2015年までに世界の貧困を半減させるための目標として、2000年に国連で採択されたミレニアム開発目標 (MDGs)。その達成に向けた日本の活動、今後立ち向かうべき課題に迫ります。

**mundi**

MARCH 2014 No.6

編集・発行/独立行政法人 国際協力機構 Japan International Cooperation Agency : JICA

〒102-8012 東京都千代田区二番町5-25 二番町センタービル

TEL : 03-5226-9781 FAX : 03-5226-6396 URL : <http://www.jica.go.jp/>

バックナンバーはJICAホームページ(<http://www.jica.go.jp/publication/mundi>)でご覧いただけます。

本誌掲載の記事、写真、イラストなどの無断転載を禁じます。



©Yuki Asada

## 遊牧民の知恵から生まれたフェルト

一面に広がる大草原。目の前に大きく開けた視界の先には、羊の群れと遊牧民の姿が見える。モンゴルの人々にとって、羊はなくてはならない存在。家畜としてはもちろん、日常生活のさまざまなものが“羊頼み”だ。

モンゴルの代名詞の一つ、円すい型の住居「ゲル」もそう。羊毛から作ったフェルトで家を覆ってしまえば、夏は風通しがよく、冬は暖かい。寒暖差の激しいこの国の人々の生活の知恵だ。

首都ウランバートルは著しい経済成長を遂げているモンゴルだが、街を少し離れるとまだまだ貧しい地域が広がっている。一人で子育てをしているお母さんも多い。その事実を知った青年海外協力隊OGの佐屋<sup>ひとみ</sup>さんは、彼女たちが自信

を持ち、自分の力で生活を支えていけるような仕事はないか考えた。そこで思いついたのが、この国の伝統が受け継がれているフェルト。モンゴルの女性たちの技術を生かせば、絶対に日本でも売れる製品が作れると思ったのだ。

羊毛を石けん水でもんでいくと、柔らかいフェルトに大変身。赤、青、黄…カラフルな色に染め、型に沿って切って縫い合わせれば、かわいい小物の出来上がりだ。「モンゴルのお母さんたちはとても働き者。フェルト製品を通じて、モンゴルや彼女たちのことをもっと知ってもらいたい」と佐屋さんは話す。

モンゴルの人々の温かさが伝わってくるフェルトの小物。あなたの生活のアイテムに加えてみては。



遊牧民から入手した羊毛を使ってフェルト作り

★モンゴルのフェルト製品を8人にプレゼント！→詳細は38ページへ

★製品の販売情報はホームページ(daladala.jp/)まで





# 私の なんとか しなきゃ!

Vol. 41

## PROFILE

1982年沖縄県出身。上智大学文学部教育学科卒業。2006年「ミス・ユニバース世界大会」で第2位に輝く。以降、テレビ、雑誌、CMなどで幅広く活躍中。07年よりWFP国連世界食糧計画のオフィシャルサポーター、2013年より国連WFP日本大使に就任。「なんとかしなきゃ!プロジェクト」メンバー。

開発途上国の女性や子どもの問題にずっと関心があって、いつか現場に行ってみたくて思っていました。縁あってWFP国連世界食糧計画のオフィシャルサポーターになって7年。毎年現地に行き思うのは、国際協力といっても一言ではくれないということ。それぞれの国には事情があって、文化も風習も違う。何が良く何が悪いのか、私たちの基準で測ることはできないのです。でもただ一つ、彼らの幸せが膨らんで、自分たちの足で立てるような協力が重要だということとは共通しています。

国連WFPは途上国の子どもたちに学校給食を配るプロジェクトを実施していますが、その現場をこの目で見るまで、この世界に飢えて苦しんでいる人たちがいるという状況が想像しづらかった。給食があれば、毎日最低でも一食はきちんと食事を取ることができます。人間の生きる源である「食」と、子どもたちの学びの場である「学校」を結びつけたこの協力は、とても大切だと実感しました。

決して裕福とはいえない生活を送る子



© Mayumi.R

できることから始めよう

## モデル 知花 くらら

CHIBANA Kurara

どもたちですが、いつも彼らは元気です。人懐こくて、世界中どこに行ってもそのパワーは同じです。お母さんたちもそう。自分のおなかを痛めて産んだ子の幸せのためなら、どんなこともがんばるという思いが伝わってきます。母は強いと感じます。

青年海外協力隊員の方々にお会いすることも多いのですが、その懸命な姿に感動します。彼らの活動には「こうしたらいい」というガイドブックがあるわけではない。壁にぶち当たりながらも、なんとか解決策を考えて、乗り越えようと努力をしています。そして、日本人のメンタリティーからなのか、いつも相手がどうやったら喜んでくれるかを一生懸命考えているのが素敵だと思います。「和をもって貴しとなす」という言葉がありますが、まさにこれこそ日本らしい国際協力ではないでしょうか。

個人的な印象としては、東日本大震災以降、日本国内で国際協力に対する考え方が大きく変わったように感じます。東北があそこまで大変な状況になって、

どのようにしたら被災地を助けられるのかをみんなが真剣に考えました。それは海外で困っている人に対しても変わらないと、私の活動を応援してくださる方も増えたような気がします。

昨年末には、国連WFP日本大使に就任しました。これからも現地に足を運び、そこで懸命に生きる人々の表情をもっと伝えたい。大変なことも多いけれど、私たちと変わらない部分もたくさんあることを知ってほしいのです。

誰でも関心のあること、得意なことはあるはずです。それがきつと、あなたが世界とつながるきっかけとなるはず。自分の持っているものをちょっとシェアするだけでいいんです。気負わず、少しずつ自分ができることを探してみませんか。

「なんとかしなきゃ!プロジェクト」は、開発途上国の現状について知り、一人一人ができる国際協力を推進していく市民参加型プロジェクトです。ウェブサイトやFacebookの専用ページを通じて、さまざまな国際協力の情報を発信していきます。

なんとかしなきゃ で 検索